



カントウータ

Cantuta

No. 38

日本人ボリビア移住120周年記念号



ボリビア公式訪問において、首都ラパスで儀仗兵を閲兵の後、献花に向かわれる眞子内親王殿下

- | | | |
|----|----------------------------|-------|
| 1. | 日本人のボリビア移住120周年 | 椿 秀洋 |
| 2. | 日本人ボリビア移住120周年に寄せて | 渡邊 英樹 |
| 3. | 2018年8月：ボリビア旅日記（その4） | 渡邊 英樹 |
| 4. | 一寸違うウユニ塩湖の光景 | 目次 英哉 |
| 5. | ボリビアの思い出 | 広瀬 美雪 |

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

<http://nipponbolivia.org>

1. 日本人のボリビア移住120周年

日本ボリビア協会会長

椿 秀洋

2019年は日本人のボリビア移住から120周年という佳節を迎え、眞子内親王殿下（以下「眞子様」）が120周年記念式典に出席されるためボリビア多民族国政府の招きでボリビアを公式訪問されました。折角の機会ですので、日本人のボリビア移住の歴史について改めて振り返り、眞子様のボリビアご訪問についてご紹介したいと思います。



写真1-1 エボ・モラレス大統領（当時）を表敬訪問

戦前移住と戦後移住の特徴

120年に及ぶ日本人のボリビア移住の歴史について振り返る前に、戦前移住と戦後移住の大きな違いについて述べておきたいと思います。

戦前にボリビアに移住された方々の特色としては、被雇用者として主にラパス県やベニ県でのゴム園のゴム樹液採取や鉄道敷設工事に従事した独身男性が多く、ボリビア人女性と家庭を築いたものの、子や孫に日本人らしい名前をつけた以外は、家庭での子女教育を母親任せにしていたため、日本語が継承されなかったことが挙げられます。ベニ県のリベラルタやトリニダ、パンド県のコビハ等の日系人の方々と懇談した際に、日本語を話せない日系人3

世、4世の方々から日本語を学ぶ機会が欲しいと訴えられたことに胸が痛みました。

また、第二次世界大戦の際、1942年にボリビアは日本との国交を断絶し、1944年には米国に協力して日系社会の指導的立場にあった29名を米国のニューメキシコ州サンタ・フェの強制収容所に送る等の措置を講じました。このためそれまでにボリビア社会の中で確固たる生活基盤を築いていた日系人が、塗炭の苦しみを味わったことを忘れるわけにはいきません。

戦後、日本とボリビアの国交は、1952年に回復され、ベニ県の日系社会が日本に支援物資や義捐金を送るのみならず、沖縄県出身者達を中心となってボリビアへの移住を強く勧奨したこともあり、琉球政府と米国政府がボリビア政府と交渉して、1954年に沖縄県人のサンタクルス県オキナワ移住地への集団移住が始まります。また、1955年には実業家の西川利通氏が企画した西川移民に応じた沖縄県以外他県人によるサンタクルス県サンファン移住地への集団移住が始まりました。そして1956年には日本政府とボリビア政府の間で移住協定が締結されました。

両移住地への移住は、戦前移住とは異なりそれぞれ家族帯同での移住が殆どでした。また戦前移住者が最初は被雇用者だったのとは異なり営農者でした。皆で力を合わせて原生林を切り開いて農地に転換するかたわら、早速学校を建てて子女教育に力を入れ、日本語もしっかり継承されていることに感服します。「イタリア人と中国人と日本人が移住したら、最初にイタリア人は教会を建て、中国人は同胞組織を立ち上げ、日本人は学校を作る」という逸話を思い出します。

因みに、1961年にラパスの日本公館が大使館に昇格し、1962年にはサンタクルスに領事館が開設されました。領事館はその後、駐在官事務所、領事事務所と名称を変更しましたが、引き続きサンタクルスに置かれています。南米では大使館が設置されている都市以外の地に総領事館あるいは領事事務所が

設置されているのは、ブラジルとボリビアとパラグアイだけです。ペルーには在リマ総領事館がありますが、大使館の中に置かれています。

日本人のボリビア移住の歴史

さて、ボリビアへの日本人の移住の歴史について簡潔に振り返ってみたいと思います。1899年9月23日、93名の日本人がアンデス山脈を越えて、ラパス県北部のマピリ川の近くのサン・アントニオに到着しました。彼らは、同年4月3日に、日本郵船の佐倉丸でペルーのカヤオ港に到着した790名の日本人移住者の中の91人とリマから同行した森岡商会の監督2名でした。彼らは、事前に説明を受けていた内容とは異なるペルーの農園での過酷な労働に耐えかねていた頃、ボリビアのアマゾン奥地が天然ゴム景気で活況を呈しているという情報に接して渡ってきた人たちでした。ペルー到着の僅か約5ヶ月後のことでした。8月31日にカヤオ港を発ってモジェンド港に到着し、そこから列車でチチカカ湖畔のプーノまで上り、プーノからはチチカカ湖を船で横断してボリビアのプエルト・ペレスに渡ります。そこからは徒歩で4日をかけてソラタを経由し、さらに6日以上も歩き続けて峻険なアンデス山脈の標高4000mを超える山並みを越えてサン・アントニオに到着したのです。その後さらにドイツ人ギュンテルがゴム園を経営するサン・カルロスに移りました。これが日本人のボリビア移住の嚆矢になります。しかしゴム園での労働内容と契約条件への不満から、彼らは亡くなった一人とボリビア残留を決めた2名を除いて1年後にはペルーに戻ります。

一方、1908年からは、アンデス山脈を越えて天然ゴム景気で栄えていたペルーのプエルト・マルドナドに移り住んでいた人々の中から、マドレ・デ・ディオス川を筏で下って、ボリビアのベニ川と合流するリベラルタに渡る日本人移住者が出てきました。彼らは、最初はリベラルタ近郊のゴム園のゴム樹液採取やゴム集荷に従事しますが、その中から資金を貯めて商店を構える者、農場を開く者も出てきまし

た。一時はリベラルタの人口の4分の1を占めるに至ります。そして、1915年にはリベラルタ日本人協会が設立されました。

故郷を遠く離れ、言葉も風俗習慣も異なる異国の地でボリビア人女性と家庭を築き、骨を埋めていった人達の心情を思うとなんとも言えない気持ちになります。16世紀からアルゼンチン北東部のミシオネス州をはじめパラグアイやブラジル南部、ボリビア東部等に多くのイエズス会の伝道所が建設されていますが、筆者は、リベラルタのマドレ・デ・ディオス川とベニ川の合流地点の河岸で両河川の流れを見つめながら、生活のために労働機会を求めて渡ってきた日本人青年達の心情に思いを馳せつつ、宗教的情熱に突き動かされて始めから骨を埋める覚悟で渡ってきたイエズス会の宣教師とは異なる、このような生き方が自分にはできるだろうかと自らに問うたことを昨日のこのように思い出します。

因みに、我が国外務省の記録によれば、1918年の時点で、ボリビアに在住していた日本人は約800人で、そのうち約700人がリベラルタに在住していたそうです。しかし、その数はゴム景気の衰退とともに減少し、1923年には260人程度にまで減少した由です。そして日系人はリベラルタからグアヤラメルン、トリニダ、ルレナバケ等のベニ県各地、ラパス県のラパスやサンブエナ・ベントゥラ、そして1938年にベニ県から分離して設置されたパンド県のコビハやポルベニルに拡散しています。そういう中でリベラルタの日系人子弟からはボリビアの国民的詩人と称され、国民文化賞を受賞したペドロ・シモセが輩出されており、またパンド県ではエルネスト・ニシカワが、知事に選出されています。

一方、1907年頃から次第にペルーから商業を目的としてラパスに移って来る日本人が次第に増えてきました。1915年頃には約100名の日系人が居住しており、ビジネス面では、日本からの日用雑貨品の輸入から始まり、ボリビア産の鉱物資源の日本向け輸出、さらには繊維織物の製造を行う会社まで出現

し、ラパスのビジネス界で一目置かれるほどになります。1922年にはラパス日本人会が設立されました。しかし、1942年のボリビアと日本の国交断絶にともなう指導層への弾圧により日本人社会の戦前の発展は終わりを告げました。現在は、オキナワ・サンファン両移住地からの転住者、日系人やボリビア人との結婚でラパスに移り住んだ日本人等、約1,000人が暮らしています。因みに、2018年末現在のその他の各県の日系人推定数は、ベニ県約6,250人、サンタクルス県約3,000人、パンド県約2,650人、コチャバンバ県250人、オルロ県10人、チュキサカ県5人となっています。ポトシ県とタリハ県は0人。日本国籍を保持している一世を入れると、ボリビアの日系社会の人数は合計約13,000人となっています。

サンタクルス県の面積はボリビアの約4分1を占め(37万600km²)で、日本の面積(37万8,000km²)とほぼ同じです。サンタクルスには1908年に最初の日本人ホセ・オオイシが定住したという記録がありますが、現在はオキナワ・サンファン両移住地から転住してきた日本人が多く居住しています。1956年には早くもサンタクルス中央日本人会が結成されています。日本人の集団移住が始まった1954年当時のサンタクルスは人口約4万5千人の小さな市で、コチャバンバと繋ぐ道路が完成したばかりでした。県内に石油や天然ガスが発見されたことや、政府の東部開拓政策等に伴って次第に西部高原地帯を始めとするボリビア各地からの転入が増え、同県が経済的に発展してきたこともあり現在は、人口200万人を越える大都市になっています。

オキナワ移住地

1954年に278名がサンタクルスから北東へ約150kmのウルマ移住地に入植しますが、原因不明の風土病(後にウルマ病と命名)に悩まされ、グランデ川の氾濫にも襲われて、翌1955年にはウルマ移住地の西130km、サンファン移住地に近いパロメティージャに移転。さらに1956年に現在のオキナワ移住地1

に再移転しています。オキナワ移住地には第1、第2、第3の3つの移住地がありますが、これらを総称してオキナワ移住地と呼んでいます。

オキナワ移住地への入植は、先述のとおり、ベニ県在住の沖縄出身者が戦後の沖縄の窮状を知ってボリビアへの移住を呼びかけたのがきっかけです。当時米国の施政下にあった琉球政府と米国政府がボリビア政府と交渉して実現したものでした。

他方、ボリビアでは1952年の革命で誕生したビクトル・パス・エステンソロ大統領が東部平原地帯、中でも国土の4分の1を占めるサンタクルス県をなんとかして開発したいとの必要性を感じていたので、両者の思惑が一致したとされています。

しかし、移住地としてあてがわれたのは、井戸を掘らないと飲み水を確保できないような未開のジャングルでした。巨大な樹木を鋸切りや斧で切り倒し、根を抜き、さらに整地する等、並々ならぬ苦勞を強いられます。そういう苦勞を経てできあがったのが現在のオキナワ移住地ですが、近年になって、整地された農耕地を始めからそのような状態だったかのように錯覚したボリビア人が移住地に侵入する事件が多発しており、移住地の人々の心勞は尽きないと伺いました。

2000年にオキナワ移住地一帯を含む地域は独立した自治体に昇格し、オキナワ市と命名されます。人口は約11,000人ですが、日系人は約850人に過ぎずマイノリティです。しかし、オキナワ移住地の人々は、世界の中でオキナワ市の名称を有する自治体は、沖縄県のコザ市が改称した沖縄市とボリビアのサンタクルス県のオキナワ市の2箇所だけだと誇りにしていました。

因みにオキナワ移住地の耕地面積(46,800ha)はオキナワ県全体の耕地面積(38,000ha。2017年)を上回ります。現在、オキナワ移住地は、小麦、大豆、サトウキビの一大生産地に発展しており、2002年にはボリビアの「小麦の都」に命名されています。

オキナワ移住地には1954年から1964年まで19次、

計572家族3,298名が入植しましたが、沖縄県人の多いブラジルやアルゼンチン等に転出する者も多く、定着率は30%だと言われています。

サンファン移住地

オキナワ移住地に遅れること1年の1955年に実業家の西川利通氏が企画した西川移民として17家族(14家族の説あり)86名がサンファンに入植しました。入植当初の開拓の苦労はオキナワ移住地と同様で様々な逸話が残っていますが、オキナワ移住地が沖縄県出身者で占められているのに対し、サンファン移住地は沖縄県を除く日本全国から応募した移住者が入植していてオキナワ移住地とは趣を異にしています。1955年から1992年まで53次、計286家族1,684名が入植しています。定着率はオキナワ移住地より高く50%だと言われています。

オキナワ移住地の2世や3世はボリビア人と結婚する者が多く、所謂ボリビア化が進んでいますが、サンファン移住地では移住地の者同士で結婚することが多く、日本語をはじめとする日本文化を継承しています。日本以上に日本的なところが残されているところも多くあります。

サンファン移住地は、コメ、鶏卵、果樹の一大生産地に発展しており、2009年にボリビアの「コメの都」に命名されています。

オキナワ・サンファン両移住地の子女は、モンテロ、サンタクルス、コチャバンバ、ラパス等の高校や大学に進学する者が多く政治家、医者、弁護士、会計士、実業家等、多くの人材を輩出しています。サンファン出身の政治家としては国会議員を務めたミチアキ・ナガタニ、サンファン・デ・ヤパカニ市長を務めたカツミ・バンイ両氏を挙げることができます。

他方、パンド県コビハの日系人会のマリア・シオザキ会長は公認会計士ですが、先述した家庭事情により祖父からは日本語を継承されなかったと嘆いていましたが、戦前移住が殆どであるベニ県やパンド県の日系人はおしなべて日本語を継承されなか

ったことを悔しがっていました。

眞子様のボリビアご訪問

眞子様は、本年7月15日から20日まで、ボリビア多民族国政府の招待を受けてボリビアを公式訪問されました。筆者もご訪問に随行しましたので、差し支えない範囲で眞子様のボリビアご訪問について以下のとおりご紹介いたします。



写真1-2 エボ・モラレス大統領主催の午餐会にてお言葉を述べられる眞子内親王殿下

(注:10月20日に実施された大統領選挙ではモラレス前大統領が一旦は勝利を宣言しましたが、選挙プロセスに不正があったと国内8県の市民委員会

(Comité Cívico) から抗議の声が上がり、最終的にはサンタクルスとコチャバンバの軍と警察が市民委員会他による糾弾に同調したこともあって、モラレス前大統領はアルバロ・ガルシア・リネラ前副大統領やガブリエラ・モンターニョ前下院議長他のモラレス政権の要人とともに、11月10日に辞意を表明、同12日にはメキシコに亡命しました。これに伴って暫定政権が発足し、ジャンニネ・アニェス

(Jeanine Añez) 上院副議長が暫定大統領に就任しています。

その後、モラレス前大統領は12月6日に、メディカル・チェックを受けるためとの理由でキューバに向かいました。メキシコ外務省は、モラレス前大統領はメディカル・チェックが終われば再びメキシコ

に戻ると述べていましたが、モラレス前大統領はメキシコに戻ることなく、12月12日にキューバから10日に左派のアルベルト・フェルナンデス大統領が就任したアルゼンチンに到着しています。アルゼンチン政府はモラレス前大統領を政治亡命者として受け入れ、表現や活動の自由等、あらゆる権利を保証する旨発表していますが、モラレス前大統領は今後はアルゼンチンにとどまり、ボリビアとの国境に近いところから、2020年4月もしくは5月に実施することが想定されている次期大統領選挙に臨む社会主義運動党（MAS）の選挙運動責任者として指揮を執ると述べています。

今後、ボリビア情勢は暫く混乱が続くと予想されますが、過去に何度もクーデターやハイパーインフル等の混乱を乗り越えてきた日系社会が、安穏な生活を送ることができるよう祈るばかりです。以下のボリビア政府要人の役職はご訪問当時のものです)



写真1-3 パリ外務大臣とともに第6代大統領サンタクルススの霊廟への献花に向かわれる眞子内親王殿下

眞子様は、ラパスではディエゴ・パリ・ロドリゲス外務大臣侍立の下で、第6代大統領サンタクルススの霊廟に献花を行うとともに大統領近衛兵による栄誉礼を受けられ、モラレス大統領が3閣僚同席の下で眞子様の表敬訪問を受けるとともに自ら午餐会を主催する等、最大限の配慮を行ったことが強く印象に残りました。この他にレビージャ市長からラパス市の鍵の贈呈を受け、ロープウェイの2路線に試乗され、さらに日本庭園、民族学博物館、日本人移住史料館をご視察された後、ラパス在住の日系人

や在留邦人、JICA関係者と懇談されました。

16日午後にサンタクルスに移動された後は、サンタクルス中央日本人会館を訪問され、記念植樹の後日系人やJICA関係者と懇談され、さらに日本語学

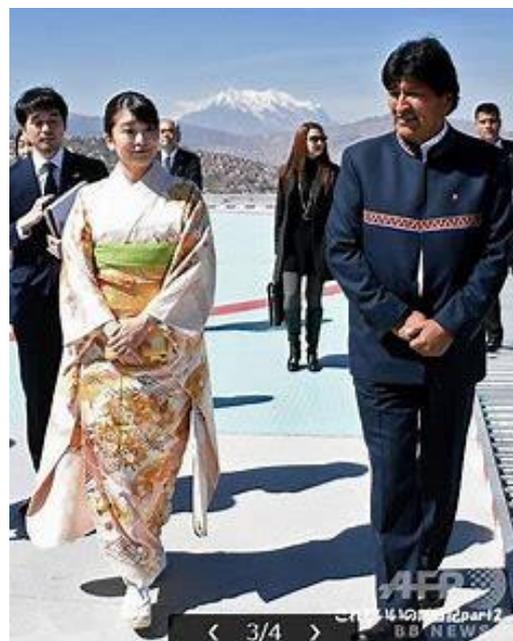


写真1-4 エボ・モラレス大統領の案内で大統領官邸屋上のヘリポートからラパスの眺望を楽しまれる眞子内親王殿下

校の生徒の作品をご覧になりつつ先生や生徒達と親しく言葉を交わされています。

17日には、今回のご訪問の主たる目的である、サンタクルス市内のホテルで開催されたボリビアへの日本人移住120周年記念式典に、ご臨席されました。同式典にはボリビア政府からはモラレス大統領の海外出張に伴い、ガルシア・リネラ副大統領が大統領代行として出席し、また、サルバティエラ上院議長が副大統領代行として参加しました。いわば正副大統領が揃って出席したことになります。さらに春の叙勲の受章者への勲章伝達と外務大臣表彰の伝達も式典の中で行われました。

120年に及ぶ日本人のボリビアへの移住の意義については、ガルシア・リネラ副大統領が来賓挨拶の中で述べた以下の言葉に尽きると思われます。

「日本人移住者は、ボリビアから何かを奪うのではなく、ボリビアで創造するために来られた。また、

日本人移住者は（自らの）基準や道理を押しつけるのではなく、他の基準や道理と対話するために来られた。そのため、日本人のボリビア移住は我が国に良い影響を与え、ボリビアの発展に寄与された。」

「家族、地域及び国家の発展のために努力され、貢献された日本人移住者とその子孫に敬意を表したい。」



写真1-5 サンタクルスでの記念式典においてお言葉を述べられる眞子内親王殿下



写真1-6 記念式典会場の様子

眞子様の日系人との触れ合いでは、高齢者に勇気と感動を与えられるとともに、若い世代にも強い印象を残されました。近年、ボリビアに限らず中南米の日系社会は若い世代の日系人としてのアイデンティティをどのようにして確立するか腐心していますが、今回の眞子様のご訪問は、若い青年男女が日系人としてのアイデンティティについて考えた

り感じたりする絶好の機会になったと思われます。

眞子様はラパスでは計99名の日系人、在留邦人、JICA関係者、サンタクルスでは計103名の日系人とJICA関係者、及びベニ、パンド、コチャバンバ、チュキサカの4県から記念式典に参列した計81名の日系人、サンフアン移住地では計245名、オキナワ移住地では計62名の日系人をご引見されましたが、できるだけ多くの方に握手しながら話しかけられ、記念撮影に応じることを心がけておられました。膨大な人数であり、いずれもかなりの時間を要しましたが、予定時間を超過することも厭わず、とにかく全員に声をかけ握手されていました。

その姿勢はご引見の場に居た人々にも無言のうちに伝わったものと思われ、一緒に感激するとともに、一生の思い出になると述べる者や思わず涙ぐむ者、緊張しすぎて笑いが止まらないと笑い続けた高校生もいました。青年男女の若い世代は、若くて分け隔てのない姿勢の眞子様と親しく接したことによって、皇室に対する親近感と敬愛の念を一層深めたようでした。

今回のご訪問で何よりも印象深かったのは上記のような眞子様のお人柄と振る舞いです。これはガルシア・リネラ副大統領が記念式典の挨拶の中で、「ボリビアに対する親愛の念、ボリビア国民に対する親切さ、高貴な御身分にもかかわらず全ての人々に親しく接する飾らないお人柄に、我々は魅了されました」と述べたことに尽きると思われます。大統領府やラパス市庁舎あるいはサンタクルス市内のご訪問先では多くの市民が一目眞子様を見ようと幾重もの人垣を作っており、教えてもらったばかりの日本語で「ようこそ」と声をかけたり、カメラのシャッターを切ったりする者が後を絶ちませんでした。

皇室からは、ボリビアへの日本人移住100周年の際には紀宮清子内親王殿下、110周年の際には常陸宮同妃両殿下がボリビアを公式訪問されていますが、日比野正靱ボリビア日系人協会連合会会長が、時事通信に、サンフアン移住地への入植当時の過酷

な環境を振り返りながら述べた次の言葉が、皇族のご訪問に対する日本人移住者の偽らざる共通の心情であろうと思われます。

「今は日本政府に感謝しているが、最初に騙されたという（感情を抱いた）ことは我々の中ではなかなか消えません。そうした気持ちを癒やしてくれるのが皇族のご訪問です。眞子様を含めこれまで4名の皇族にご訪問頂きましたが、移住者を思い、忘れていないということを示して頂いています。若い世代がアイデンティティに目覚める機会にもなっています」（7月21日付け時事通信）

なお、眞様はラパスでは日本人移住資料館で日本人のボリビア移住の歴史を、サンフアンとオキナワの両移住地の移住史料館では、それぞれの地でそれぞれ異なる移住や開拓の歴史を有することを改めて確認されていました。ラパスの日本人移住資料館で案内役を務めた田中清彦前館長が「これから過去の資料や物品を収集するのは極めて困難ですので、今後のために現在のものを残していくよう努めています」と説明していたことが正鵠を射たものとして印象に残りました。

サンフアン移住地では一区画に入植当時の原生林がそのまま保存されていて、「犬も通わぬサンフアン」と謳われた密林の状況が目に見える形で理解できるようになっています。後世の人々が開拓当初の自然環境を知ることができるためによくぞ原生林を保存してこられたと先達の慧眼に感服しました。なお、眞様はグエンベ自然公園を散策される中で、移住地以外のサンタクルス県の密林の状況とそこに生息する動植物について見識を深められたことと拝察します。

また、サンフアン学園を訪問された際には、生徒が胸の前に両手でハートマークを作って挨拶したところ、眞様も胸の前にハートマークを作ってお返しされ、ビルヘン・デ・ファティマ乳幼児養護施設を訪問された際にはお帰りの際に近づいてきて

抱きついた幼児を、腰を低く落として優しく抱きとめられていました。これらの対応は全て、相手の行動に眞様様が咄嗟に反応されたものばかりでしたが、現地では非常に好意的に受け止められていました。



写真1-7 ラパス日本人移住資料館ご視察

眞様様のボリビアご訪問の反響

大統領官邸での眞様の大統領表敬訪問の際、モラレス大統領は、話題が途切れたところで思い出したように表敬が行われていた「イリマニの間」の名前の由来について説明の上、「（ラパス市の象徴であり日本で言えば富士山に相当する）イリマニ山がよく見えますよ」と眞様を窓辺に誘い、さらに突然思いついて「屋上のヘリポートからはラパス市の全貌を一望できますが、屋上に上ってみませんか」と誘いました。眞様はこれに快く応じられましたが、翌日の現地各紙には屋上のヘリポートでモラレス大統領が眞様をエスコートしながら案内する写真が大きく掲載され、TVでもニュースでその模様が繰り返し報じられていました。ご訪問後は全国ネットのTV局のPATが45分間の眞様様のボリビアご訪問の特集番組を放送していましたが、ガルシア・リ

ネラ副大統領が祝辞で殿下のお人柄について触れたことといい、眞子様のご訪問がボリビアの人々に与えた影響がいかに大きかったかを物語るものだと思います。



写真1-8 サンファン移住地ご訪問



写真1-9 オキナワ移住地ご訪問

眞様様のボリビア訪問のご印象

宮内庁のホームページ (<https://www.kunaicho.go.jp/page/okotoba/menu/43>) に、掲載されていますが、眞様様はペルー・ボリビア訪問の際に感じられた日系人の印象について次のような文を寄せられています。日系人の方にとっては励みになる温かいお言葉だと思います。

「いずれの国でも、様々な場面で、日系社会の中で

日本の文化が継承されていることを感じると同時に、日系の方々をはじめとする多くの人々の協力のもと、日本の文化や日本語に接し学ぶ機会が作られ開かれていることを実感し、喜ばしく思いました。日本語を流暢に話される若い世代の日系の方々にもお目にかかりました。」

「日本からの移住者とそのご子孫が、大変な苦勞と困難を勤勉さと誠実さを持って乗り越えてペルーとボリビアにしっかりと根をおろし、その発展に貢献され、人々の厚い信頼を得てこられたこと、日本・ペルー、日本・ボリビアの架け橋となつてこられたことに、改めて、心より敬意を表します。そして、日系の皆様が築き上げて来られた歴史が未来を担う若い世代にも大切に引き継がれていくことを願ひ、私もその歴史を心にとどめてまいりたいと思います。」

「これからも、日系社会の皆様がお元気で末永く活躍され、日系社会が一層発展しますよう、また今後とも日本とペルー、日本とボリビアの友好関係がますます深まりますよう、願っております。」

(以上)



写真1-10 ビルヘン・デ・ファティマ乳幼児養護施設ご訪問

2. 日本人ボリビア移住120周年に寄せて

日本ボリビア協会相談役

渡邊 英樹

一昨年の沖縄県人ボリビア移住110周年記念式典に続いて、今年、日本人ボリビア移住120周年記念式典が開催された。省みること75年前の太平洋戦争の敗戦からさらに45年も遡る時に日本人が、初めてボリビアの地を踏んだことになる。

その人達の大半は、自動車の発達によりタイヤに使われるゴムの需要が急拡大したことにより、アラスカのゴールドラッシュさながらの様相を呈したという天然ゴムの採取により、一獲千金を目指した人々であった。一説にはこのアマゾン上流域のリベラルタの周辺に約2000人の日本人がいたという。リベラルタとマモレの間に建設が始まったマモレ鉄道の工事に沖縄県人が従事していたとの記録もある。そして、勤勉と実直さによって徐々に経済的基盤を作り、立派に社会的地位も築き上げつつあった。

ところが、その地位を第二次世界大戦の敗戦によって完膚なきまでに破壊されてしまった。戦争というものは残酷である。米国による敵国日本と日本人に対する侮蔑と迫害そして殺戮の正当性を喧伝するニュースや映画が世界中の連合国側の国々に流された。

米国において日本人が土地を没収され捕虜収容所に収監されるニュースは、ボリビアの僻地であるリベラルタ周辺の人々に、日本人を迫害したり、土地財産を没収することを正当化させた。そして、日本人は、その迫害を逃れるために、自らのルーツを自分の子や孫にもひた隠しにして孤独の中を生きざるを得なくなった。

戦後は、ボリビアのサンタクルス県に焦土と化した沖縄や長崎から、新天地を築こうとして、6,000人にもおよぶ移住者がやって来た。うるま植民地、サンファン移住地に入植したが、双方ともに戦場よりひどいと言われるほどの筆舌に尽くせない苦勞の連続であった。すなわち、このボリビアの日本人

移住者は、世界の中でも類を見ないほどに先の大戦で、犠牲を被った人々と言っても過言でない。

私は、1969年7月のアポロ11号の月面着陸の日にボリビアの海外移住事業団サンタクルス支部に着任したが、その頃は、まだ多くの戦前の移住者の方も存命であり、往時の苦勞話も聞くことができた。孤独に生きた戦前移住者の子弟は、日本人であることを隠し、日本語を話さなかったためにスペイン語中心のコミュニティを築いており、一方、戦後のコロニアサンファンとコロニアオキナワの移住者は日本語中心のコミュニティであり、双方の間の交流は、おのずと希薄なものにならざるを得ず、そんな時代が長いこと続いたのである。

ところが、近年になって両コロニアともに経済的にも著しい発展をし、道路、通信等の社会基盤も整備され、さらには世代交代によって、スペイン語の堪能な世代がコロニアの中心的役割を担うことになった。その結果、両コミュニティ間の交流が活発化して、サンタクルスの日本人社会の一体感が醸成されるようになった。このことは、戦前、戦後の双方の移住者のご苦勞を知る者にとっては、この上なく喜ばしいことである。

そんな体験から、私は、この120周年記念式典は、ボリビアの日系人にとって、過言の呪詛から解放されて、ようやく新たな発展を目指すところに辿り着けた記念と捉えているのである。この祭典をスタート点として、日本人の絆を大切に、一丸となって新たな発展を目指して行かれますよう祈念してやみません。

3. 2018年8月：ボリビア旅日記

(その4)

元海外移住事業団ボリビア駐在

渡邊 英樹

8月13日 コロニア・サンファンへ

6:30 サンタクルスを出発

サンタクルスからコロニアサンファンの入口のサンタフェまで120キロ、そこから移住地まで12

キロの旅程である。私がボリビアに着任したのは1969年7月19日(日本時間の20日)正にアポロ11号の月面着陸の日であった。

その頃のサンファンまでの道路は、舗装はされていたが、ところどころにデコボコの穴があるので、特に夜の運転には用心が必要だった。両側から背の高い再生林が迫ってくる街灯のない真っ暗闇の道をボロのジープで数え切れないほどの回数を往復したことが懐かしい。子供が病気になった時には、サンファン診療所の日本からの派遣医に診てもらうために、一日に2往復した経験もある。こんな時、眠気を覚ましてくれるのが車のヘッドライトの中に現れる動物達であった。体長1メートル近くある太ったイグアナが、ユーモラスな格好で車の前を走ってくれるのには癒された。道路を横切るのが毒蛇か毒グモの時は急ブレーキを踏んで轢いてしまったこともある。ナマケモノを捕まえて家に持ち帰り、裏庭のマンゴーの大木に放し飼いにしていたが、3ヵ月位したらいなくなってしまった。

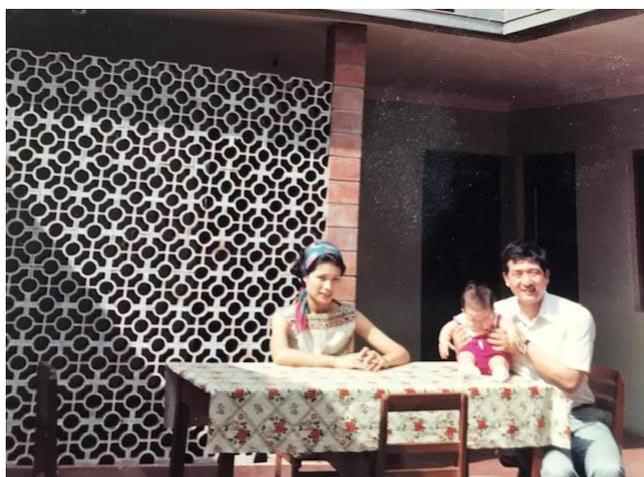


写真3-1 生後5ヶ月の長女と共に最初に住んだオール口通りの家のパティオ。裏庭にマンゴーの大木があった。

リオグランデ対岸の原始林の中を夜に車を走らせていた時のことであるが、一瞬「ゾウ!!」とドキッとしたことがある。何とそれは、大きな長い口先を持った大アリクイであった。南米大陸にいるはずもないのにゾウ(象)とってしまうほどの巨大な姿で、目の前をゆっくりと横切っていくの

を見送った。一度だけ大アリクイの肉を食べた経験もある。コンビーフの缶詰の肉のようなほぐれ方をしてしたが、色は黒っぽい。脂肪分は少なく、大味で、お世辞にも美味しいとは言えなかった。

ゲバラ戦士・フレディ前村

50キロ地点にあるコロニアサンファンとコロニアオキナワへの道の分岐点であるモンテロの町を左手に折れると直ぐにレンジャー部隊の駐屯地に差し掛かる。私が、着任したのは、ボリビアでチェ・ゲバラが殺害されてから、まだ1年10ヵ月しか経っていなかった。従って、このレンジャー部隊には、ゲリラの残党狩りのために、ベトナム戦争でベトコンと闘った米軍のグリーンベレーの兵士達が、ボリビア人部隊を指揮し訓練するために、まだ大勢残っていた。

ところで、ゲバラの兵士の中に日系人がいたことは、当時は、まったく知られていなかった。確か、1970年頃、直木賞作家の三好徹さんが「ゲバラ日記」(正式書名は「チェ・ゲバラの声—革命戦争の日々—ボリビア日記」三好徹訳2002年4月刊行)を書くためにボリビアへ来られて、サンタクルス支部で歓迎会をし、一緒に食事をしたこともあったが、この話題はいっさい出なかった。この「ゲバラ日記」にもフレディ前村に関する記述はなかったと思う。フレディのお姉さんの出版本(「革命の侍—チェ・ゲバラの下で戦った日系二世フレディ前村の生涯」マリー・前村・ウルタード著・監修伊高浩昭・松枝愛訳・2009年8月刊行)が10年ほど前に公になるまでは、誰も彼のことを知らなかった。もし、当時、ゲリラ戦士の中に日系人がいると知られていたらコロニア・サンファンもオキナワもグリーンベレーの監視下に置かれて、日本人移住者の往来は、全て厳重な検問を受けたのではないかと思い、ゾッとしたものである。フレディ前村は鹿児島県出身で戦前の移住者に父に持ち、奨学生としてキューバの医学校に留学中に、チェ・ゲバラに共鳴して、ボリビアにいる

家族にも秘して、ゲバラの部隊に合流している。幸いに「エル・メディコ」等の愛称で呼ばれていたこともあり、彼が日系人であることは当時知られていなかった。ほとんどのメンバーがボリビアのレンジャー部隊に捕らえられて拷問を受けて白状して行く中で、彼は勇敢にも何も喋らず処刑されたと言われている。

そのレンジャー部隊の前を通過して、かつては、橋がなかったためにサンファン移住者の往来の難所であったピライ川の橋を渡り、昔、中継の休憩時間を取ったポルタチエーロの街に入る。ここは白人主義の町で今でも先住民族の人は少ないという。食堂に寄って、喉の渇きを癒すために冷たいチチャ(トウモロコシの甘酒)を頼んだことがあった。なんと、私と妻のコップの双方にウジが浮いていた。暑さと渇きで熱中症寸前の状態に勝てず、二人でそれをスプーンで掬い出して捨てて飲んだ。それは、ひょっとしたら黄色人種である我々に対する嫌がらせであったかもしれないが、こんな事に頓着していたら生きていけない環境だった。そして、ブエナビスタ(良い景色)に至る。ここまで来ると「サンファンも、もうすぐだ」というホッとした気分になるのは当時と変わらなかった。この街は小高い丘の上であり、原生林の先にアングスの裾野の山並みが見渡せる景観から、今は、平屋の素朴なホテルが何軒も建ち並び、アメリカ人のジャングル体験ツアーの拠点になっているとのことである。

9:40 サンファン移住地12キロの中心地に到着。コロニアサンファンの友人宅を訪問

夫婦で、最初にサンファン移住地を訪れた時には、この中心地にあった「迎賓館」と称する建物に泊まった。夜9時に発電機が止まり、消灯となったが、真っ暗闇の中の物音に驚いて懐中電灯で照らしたら何とコーモリのファミリーが天井の穴から飛び出して来ての歓迎であった。ドアを開けて外に追い出して再び湿気を帯びたベッドに横た

わって眠った。こんな時も大騒ぎをしない肝玉の座った妻があつてのボリビアでの10年間の生活であったと思う。

サンファン日本ボリビア協会の沢元静雄会長、サンファン農協の坂口功組合長を表敬訪問。どちらのお父さんとも近しくお付き合いさせていただいたので、想い出話に盛り上がる。沢元家は養鶏による卵の販売を手広くやっていて、沢元会長のお父さんの良雄さんはサンタクルスにも拠点を持っていたこともあり、サンタクルス市の日本人会長をされていた。その折に、日本人共同墓地の建設で協力しあった仲である。事業団の融資担当で苦楽を共にした坂口清さんのご長男の坂口組合長は娘春奈のことも良く覚えておられた。妻のお腹に長男がいて流産が危惧された時に、安全を期してサンファン病院に2か月間入院させたことがあった。その時に、同行した娘をここの幼稚園に通わせていた。功さんが病室に迎えに来てくれて、一緒に通園していたと思う。長崎県出身者が、50%以上を占めていたため移住地の標準語となっていた長崎弁を娘がしっかりと身につけてサンタクルスに戻ってきたのには驚かされたものがある。坂口組合長と話していると池田さんが迎えに来てくれたが、私の知っているブルートーカーの池田ことブル池さんではなく息子さんの潤さんの方であった。まったく瓜二つで、ご本人と完全に間違えてしまった。池田さんの案内で、石澤邸を訪問した。当時、妻が長女が着ていた幼児服を石澤夫妻のお子さんの出産祝いとして差し上げたいが、それが親族の娘の洗礼式用の衣装として次々と引き継がれて今も大切に保管されていると聞かされてビックリ！50年近くも大切に使用させていただいたことに感謝を申し上げる。家具類は、筆者が、その創業時に請われて社長になったこともある日ボ合弁企業の製品で、未だにビクともしないとのことである。

入植当初の移住地は全国からの知らない人々の寄り集まりであるから、同県人が親戚と見なされ

た。私と同県の長野県出身であった唯一の石澤家。そこで、登志雄君の結婚式では、私が親戚代表として祝辞を述べた。また、登志雄君が「渡邊さんの弟にして欲しい」というので、それを認めた間柄であった。14年前に訪れた時には、米作2000ヘクタール、牧場2000ヘクタールの大農場主となっていた。牧場の見廻りのために作った車の走れる道路だけでも64キロあると嬉しそうに語ってくれた。今回も再会を楽しみにしていたのに昨年亡くなってしまわれた。リビングに整えられた祭壇に日本から持ってきた友人の画家の描いた花の絵を供えさせていただく。合掌。

さらに、サンファン移住地の共励区、ビクトル区まで足を延ばす。この区の野球チームからはよく対戦を申し込まれ、ピッチャーとして海外移住事業団のチームを率いて試合をしたものである。



写真3-2 後列石澤夫人と娘さんと共に。

途中、サンタクルス支部で一緒に働いた林英次さんのお宅へ立寄る。林さんは早稲田大学を卒業して、日本語の教師として、ボリビアに来て、こちらで結婚されて、その後、事業団の職員となった。今はサンファン移住地で牧畜をされて悠々自適の生活をされている。お互いの子供達の歳も近かったこともあり、話題はもっぱらそのことであつたが、林さんのお子さん達は、色々な国籍の方々と結婚して、その住む国も様々で、その多様性に驚かされた。



写真3-3 左から池田さん、筆者の長女、林さんご夫妻、筆者。

次にビクトル地区から戻って池田さんのご自宅へ行った。池田さんのお子さんやお孫さんの立派な家が何軒も連なる景観は池田通りと言った趣きがある。お孫さんの1人が池田建設をやっている、サンファンの中心地の近くで、ゲート付きの関係者以外立ち入り出来ない高級住宅地の造成を始めていた。私より6才年長のブル池さんは、2度も脳梗塞を発症したとのことであつたが、車椅子ではあるものの、頭はしっかりとっていて昔話で盛り上がる。



写真3-4 左から石澤夫人珠恵さん、筆者親娘、池田篤雄さんご夫妻、池田潤さん夫人典子さん

(つづく)

4. 一寸違うウユニ塩湖の光景

石油天然ガス・金属鉱物資源機構

目次 英哉

1 ウユニ塩湖を横切って通勤

私は5年ほど前に、ボリビアの南部にあるウユニ塩湖で仕事をしていました。ウユニの街の宿から塩湖の南の畔にある仕事場に毎日車で通っていました。塩湖の淵を回る道路は未舗装で砂埃がひどく、スピードも出せないで片道1時間半も掛かりました。一方、塩湖に水が無い乾季には、毎日もっぱら塩原を横断して近道をしていました。

最近では雨季のウユニ塩湖で「天空の鏡」を見るツアーが大賑わいですが、水のある塩湖の上を走ると車が塩で傷むので、我々は水の無い時期と場所だけしか塩湖の上を走りませんでした。毎年、年末から4月頃までの雨季には塩湖全体を水が覆う事もありますが、5月頃になると水は徐々に干上がって切れ切れの水溜まりになり、7月頃には流れ込む川の河口付近以外は乾いて硬い塩の大地になります。この干上がった塩湖の上を進むと、距離的に近くなる上に「高速通勤」が可能になるので、この頃になると、そろそろもう塩湖を通れるようになったかと様子を見に行きました。

水が引いた直後の塩原には、表面だけ硬くてその下がぬかるんでいたり、塩が膨張して盛り上がって凸凹になったりしている場所があり、その場所や範囲は時期によって変わります。こういう場所に入り込むと車がスタックする可能性もあるので、慎重にルートを選ぶ必要があります。そのため乾季の初めにその年初めて塩湖を横断する日は、ちょっとした探検気分になるものでした。

刻々と様相が変化していくこの時期のウユニ塩湖では、雨季の観光ツアーの時期とはずいぶん違った光景が見られました。そうした例のうち今も手元に写真が残っているものを、幾つかご紹介します。

2 ウユニの特産「塩チップス」

南米では雨季は夏で、乾季が冬です。従ってウユニ塩湖が干上がりつつある乾季の入り口は気温

がどんどん下がってゆく時期で、6月になると塩湖周囲の明け方の気温は零下10°C以下になります。それでも、塩湖の上に残る水には塩原の塩がたっぷりと溶け込んでいるので、凍ることはありません。厳しい寒さの中、まるで雪原のような白い塩湖に、凍っていない水溜まりが点在する事自体も、実に不思議な光景なのです。

乾季には晴天の日が多く、塩湖の上は冷たくて乾いた強い風が吹きます。そのため水溜まりの塩水は、気温は零下でも、どんどん蒸発していき、やがて干上がって消滅します。その跡には水に溶けていた塩分が結晶になって残り、塩原の表面を覆うという訳です。

このような時期のある日、塩原上で写真のような光景を見付けたことがあります。塩原の表面数メートル四方の範囲を、小さい白い板のようなものが無数に折り重なって覆っているのです。拾い上げてみると、直径が5センチ、厚さ1ミリほどの、やや反り返った丸い円盤でした。色は半透明の白ですが、大きさや形は正に「ポテトチップス」です。



写真4-1 塩原の表面に折り重なる「塩チップス」

思わず齧ってみると、歯ごたえは正しくポテトチップスそっくりですが、味はまさにウユニ塩湖の塩そのもので、マグネシウム分が多いため「セロリの味」がする「塩チップス」でした。



写真4-2 手に取った感触は「ポテトチップス」そのもの

この「塩チップス」は、その後も何か所かで見掛けました。チップスのサイズがやや小さめの場所もありましたが、一か所にあるチップスはどれもほぼ同じ大きさでした。何故こんなものが出来るのか不思議でしたが、その後、風の強い日に塩原の上に残った消滅直前の小さな水溜まりを見た際に、塩チップスの出来方が判りました。

塩原上の水溜まりの表面には、水の蒸発で溶け切れなくなった塩が小さな結晶になって浮いていて、徐々に大きくなり、通常はある程度の大きさになると、水面から沈んで水溜まりの底に溜まります。しかし風が強いと水面が風で常に波立ち、表面に浮いている塩の結晶が揺すられて、周囲の結晶とぶつかり、結合して、水面に沿って横に板状に大きくなります。そして風で煽られてくると回り、周囲の他の結晶と均等にくっついて、丸くなるのです。こうしてある程度大きな円盤になると、もう水面に沈むことは無く、風でくると回りながら、やがて水溜まりの縁に流されて、積み重なってゆきます。一か所でずっと観察して確かめてはいませんが、この状態の水溜まりが完全に干上がって消滅すると、その跡にこの塩チップスが折り重なって残るのだと思います。

誰が意図した訳でもないのに、誰も居ない塩湖の上でこんな物が毎年自然に作られているというのは、何とも不思議な現象です。

3 夕暮れの「たこ入道」

乾季である冬の塩湖の特徴は、寒いけれど天気が良い事です。特に塩湖がほぼ干上がる8月以降の数か月は晴れる日が多く、雨はほとんど降りません。そのためウユニ塩湖から東の方に遠望される東アンデスの山々の色は、夏の間は山の上は雪が降って頂は白くなるのですが、冬になると夏降った雪も風で吹き飛ばされて、却って黒くなるという、我々の常識と相容れない現象が起こります。

そうすると、ウユニ塩湖でも終日快晴という日がよくあります。そういう日に、仕事が長引いて帰りが遅くなり、日暮れ前に塩湖の上をウユニの街に向けて東に走っていると、高い山が無い塩湖西側の「ほぼ地平線」に沈む夕陽の光が、限りなく水平に近い角度で射して来ます。

これだけ低い角度で日が差すと、塩湖の上を走る車の影が不思議な形になります。車体は相対的に上方に小さくなるのに対して、その下のタイヤが縦に非常に長く見えるので、まるでタコクラゲのような形になります。夕日が車の真後ろか真横から射せば、たこ入道は二本足ですが、斜めから射すと、四本足になります。乾季の夕方の仕事帰りの塩湖ドライブでは、よくこの「たこ入道」が隣を並走していました。

塩湖上では日が沈むとすぐに暗くなり、塩原の表面が見えなくなります。特に乾季の初めは塩の表面に凹凸や障害物があるので、暗くなってから塩湖を走るのは大変危険です。本当かどうか判りませんが、塩湖を通過して目的地に着く前に日が暮れてしまい、そのまま二度と帰らなかった車が何台かあると、地元の人には言っていました。但し、これはGPSも携帯電話も無い頃の話だと思います。日の長い乾季の夕暮れに塩湖の上を走るのは、仕事が長引いて遅くなった日なので、そういう時に出て来る「たこ入道」には、早くしないと日が暮れるぞ、と急かされているような気がしたものです。

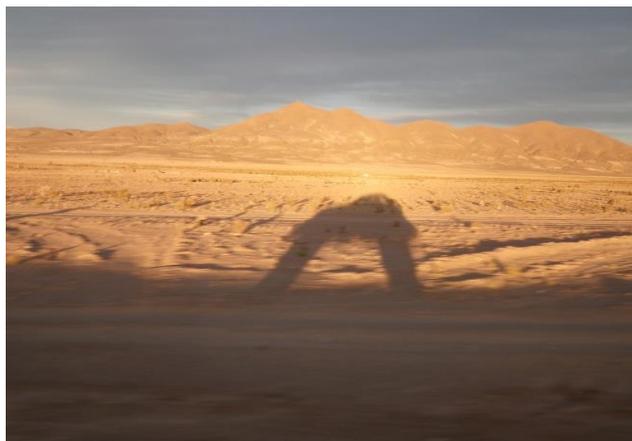


写真4-3 二本脚の「たこ入道」。この写真は塩湖の周りの陸路を走っている時に出来た影



写真4-4 四本脚のたこ入道。塩原は夕日でややピンクに染まっています

ウユニ塩湖で仕事をしていた時期の半ばには、ラパスから飛行機が飛ぶようになり、観光ブームが始まりました。それまで塩湖を訪れるのは主にヨーロッパからのバックパッカーで、専ら「乾季」の塩原を見に来ていました。しかしブームが始まると今度は日本人が「雨季」にどっと押し寄せるようになり、地元のガイド達は「シーズンオフが無くなって休めない。」と嬉しい悲鳴を上げていました。

どんな場所でも、訪れる時期や季節が違えば様子は随分異なることでしょう。機会があれば、「塩チップス」と「たこ入道」が現れる乾季のウユニ塩湖も訪ねてみて下さい。きっと、ボリビアの新しい自然を発見できることでしょう。

(終わり)

5. ボリビアでの思い出

元青年海外協力隊隊員

広瀬 美雪

私が青年海外協力隊の一員としてボリビアを訪れてからもうすぐ10年が経とうとしている。今振り返ると任期で滞在した2年間はあっという間と感ずるほど短い期間だったが、私の人生の中でも特に充実した中身の濃い時間となった。到着して3週間、最初に受けた洗礼は、街の最も低い地点の標高が3640mに達する首都ラパスで、これまでに無い程の酷い下痢と嘔吐、発熱で入院したことである。私達ボランティアの一団がサンタクルス領事館へ挨拶に行く日にも独りラパスから動けず、ベッドの上で自分の体を恨めしく思ったものだ。体調不良の原因は高山病で、少し回復したからとラパスから赴任地のサンタクルスへ降りたらケロッと治ってしまった。そんな事もあり、高地やジャングル地帯へ赴任する同期生は、もっと過酷な生活なのであろうと想像して自分の任地環境なんてたいしたことはない、とちょっとの事にはへこたれないようになった。

当初はボリビアで見るもの聞くものが日本とは大分異なり、習慣や文化の違いに驚かされる事が多かった。例えば、ココアの葉をガムのように噛んでいる大人の歯はボロボロな一方で、赤ちゃんの哺乳瓶にコーラが入れている事もあった。裏に砂が付いた靴のままベッドに上がる人もいてシーツが砂だらけになった。歩道や道路に少々薄汚れた感のある人が倒れていて、死んでいるのでは?!と驚き目を見張ったが、酔っ払いが寝ていたのであった。また、南米では普通かもしれないが、仕事には定時がない(ホントはあったのであろうが)。在庫管理や計測なども大まかで、案の定、その都度、数が合わず、傍で見ていた私が慌てたものである。ここまで書くとボリビアの悪口をつづっているようであるがそうではない! これらも含めてボリビアなのである。皆おおらかで優しく、大体の人が明るく親切であった。「Esta bien」

「No importa!」「大丈夫」「問題ないよ」とよく言われたものである。



写真5-1 サンタクルス保健所での活動。近くの教会で集まった子供達に栄養バランスについて話す様子。

栄養士として赴任した私が何をしていたかという、妊婦や赤ちゃん子供達に関する日本では本当に基本的な知識や栄養バランス、衛生についての指導が主であった。私の勤務先の保健所では、上司や同僚が、突然やって来たスペイン語も拙く大した仕事も出来ないアジア人を優しく迎え入れてくれて、お母さん方に「日本から栄養指導に来てくれたんだよ、彼女の話をよく聞きなさい」と紹介してくれた。そのおかげで見下される事や冷たい扱いを受ける事もなく、順調に活動を進める事が出来た。私は本当に上司や同僚に恵まれていた。有り難いことであった。保健所での活動以外では、サンタクルス地域の探索、旅行、郷土料理にダンスと色々な事を体験してボリビア生活を満喫した。同期が多かった私の年次にはシニアも含めて16人もいたので、各県に赴任した隊員の家を旅の宿としてかわるがわる訪問した。旅の移動は安全とは言い難かったが、座席のランクを上げれば快適な深夜バス。コチャバンバやトリニダまで約9時間、ラパスには16時間で寝ている間に着くのである。ラパスへの16時間はヘビーであったが、私は安くて寛げて途中の様子が垣間見えるバスが好きだった。それでもトイレの無いバスでは途中の休憩時間には、油断していると人数を確認しない運転手に本当に置いていかれるので、遅れて取り残されないように必死であった。道路や設

備が整っていない場所では降ろされた野原が“公衆トイレ”である事は、ボリビア内をバス移動した事がある人ならば一度は体験する。乗客が皆でしゃがみこむことよりも、バスで漏らしたり、騒いでバスを止めさせたり、降ろされる方がよっぽど恥ずかしいので、そこは無我の境地で野原の中にしゃがみ込む。リュックの中にはティッシュではなくロールペーパーを常備するのが習慣になった。自然に帰らないペーパーが花のように野原に点在することは問題であったが、その当時は已むをえなかった。今ではだいぶ整備も進んでキレイな本当の意味での公衆トイレが増えたと聞いている。サンタクルスでは、毎週のように現地の人に混じって民族ダンスを習い、高地のオルロで南米三大カーニバルに称されるCarnaval de ORURO”にも参加した。この祭にはボリビア全土から、この日の為に準備された華やかな衣装に身を包んだダンサーと音楽を奏でる人たちが街を練り歩き、観客はビールやチチャなどお酒を楽しんでいた。普段は貧しく一日中働いているような人もこの時は特別で、子供も大人も童心に返って、この土地の風習に乗じて水を掛けあつたり泡だらけになったり、飲んで踊って皆が時間を満喫していた。



写真5-2 オルロのカルナバルに協力隊チームで参加。標高3700mの高地を4kmパレード。衣装の帽子は各自手作り。

もちろん酔っ払いも多くケンカも見かけたがご愛嬌で。ボリビア人にとっての特別な日、特別な時間を私も一緒に楽しませてもらった。標高3700m

の高地で酸素が薄いはずなのに、そのオルロでは喜んで長い時間をを踊りまくっていた。ボリビアの土地に慣れたのか、高揚した気持ちのせいなのか?! オルロよりちょっと低いラパスに少し暮らただけで入院した赴任当時の自分に喝を入れた。そして、そんな私のボリビア生活において、ロドリゲス一家は欠かせない存在だ。思い出深い日々を一緒に過ごした愛すべき家族のことを少し紹介したい。初めて参加したパレードで、前の年のチームの代表からその年の代表へ引き継ぎ式のような物があり、そこで初めて挨拶を交わしたが、一年後にお付き合いをする事となったロドリゲス家の次男君である。その場では30歳と言われたが本当は19歳であった。当時私は35才、嘘をつく方もつく方だが、騙される方も相当アホである。ボランティア1年目は栄養士の活動でいっぱいだったが、2年目は時間の使い方にゆとりも生まれ、色々なことに挑戦していた。その一つがダンスであり、男性のチームリーダーが彼であった。「Mi linda」「Mi amor」などと言われ、「年齢なんて関係ない!」「愛している」の言葉に浮かされて数ヶ月後には恋仲となり、真面目に結婚も視野に入れ始めた頃、ボランティアの任期が終り、帰った日本で私が振られるというサプライズもあって、ロドリゲス家の中でもひと悶着あったようだが、今ではすっかり笑い話である。



写真5-3 ロドリゲス一家でクリスマスを祝う。在任中に天国に旅立ってしまったおばあちゃんも一緒に。

最初のパレードから出会った彼の家族は私に本当に良くしてくれて、ボリビアの生の家庭を私に体験させてくれた。お母さんの年齢はなんと私の2才上!若くしてお父さんと結婚し、子供を3人育てながら女手ながらサンタクルスでレストランを切り盛りしていた。朝の5時からお父さんの車に家族皆乗り込んで市場に仕入れに行く。その足でレストランに向かい、お父さんも子供達もレストランで朝食を食べ、それぞれの学校や仕事場所に向かう。午後には子供達は学校から戻りレストランで宿題をして夕食を摂る。学校の無い日は子供達もお店を手伝っている。お父さんの仕事もレストランの営業も夜遅くまであり、全員揃ってまた一台の車に乗って家に帰っていく。私は彼の家やレストランで過ごす事が多くなり、家族に混ざってご飯を食べさせてもらったり、一緒に旅行に連れていってもらったり、週末には散歩や外食でご馳走してもらった。お前は娘だと可愛がってくれていた。私もお礼に食べた後の食器を洗う、ご飯を作ったりお掃除をしたりする、すると「美雪は働き者だ」とやたら褒められる。もちろん悪い気はしないから更に頑張る。良いローテーションが繰り返されていた。そうもしたくなるほどこのボリビア人一家は真面目な働き者で、特にお母さんは、日曜以外、朝の5時から22時頃までずーっと働いていた。それに加えて家族全員分の家事もやっているのだから、労りたくなるのは当然であろう。お店の経営や子供の勉強などについて、料理を一緒にしながら穏やかに話すお母さんが私は大好きであった。お父さんも別途車の整備工場を自営でやっていて、口数は少なかったが性格の温厚さが滲み出ていた。良き父であった。真面目で優しい長男君、楽道家でちょっと調子の良い「Mi amor」次男君、人懐っこく純粋な三男君。愛すべき素敵な家族であった。日本に帰って次男君が私のボーイフレンドでなくなっても、「美雪は私達の家族だ、娘だよ」とボリビアの家族は言ってくれて、ボリビアにいた時と関係は変わらず、忘れ

かけているスペイン語をなんとか使い近況を報告しあっている。FACEBOOK や Messenger でリアルタイムに繋がるので、滅多に会わない学生時代の友達より、よっぽど多く連絡を取り合っているのではないかと思う。普通のボリビアの家庭の毎日に私を加えてくれたボリビアの家族にはとても感謝し、ずっと繋がりを持って行きたいと思っている。そして、いつか出来る事なら、この家族を日本に招待してあげたいと思っている。あと 20-30 年あれば出来るかな？

他に思い出すエピソードとしては、オルロの田舎で生活していた隊員の家に泊まらせてもらった際ペットボトルに水を入れ太陽熱で温めた水で髪を洗った事、移動バスがいっぱいにならないと出発しない運行制度や、ラパスの田舎町へ旅行に行った際、寒いと思ってかけ布団を持参した私の寝床に知らない人も含め 4 人位でぎゅうぎゅうになって寝た事、サンタクルスでひったくりにあった私を優しい言葉でなぐさめてくれたのは物売りの貧しそうなお婆さんであった事、ウユニ塩湖の 360 度の銀世界に感動を通りこしてびっくりした事などなど、次から次に思い出すほど、ボリビアにはユニークなエピソードが沢山あった。



写真5-4 オルロのクラワラ中心地の公園。小さな屋台の周りで談笑する村人達。

私のキャパオーバーな位充実した時間をもらう事が出来た。一方で、活動を始め半年ちょっと過ぎた頃、私の地元の山梨から TV 取材の人達が飛行機を 2-3 日乗り継いでわざわざボリビアまで来

てくれてビックリした事があった。まだ何も出来ていないころだったので申し訳ないやら照れくさいやらで、かなり愛想の無い対応をしてしまった事が今では悔やまれる。任期最後の保健所での出勤日には、「日本もボリビアも関係なくお母さん達は可愛い我が子が元気に成長する事を願っているんだよ」という思いを歌詞に込めて、夏川りみさんの「童神-わらびがみ」を日本語とスペイン語で歌ったのだが、号泣しながら歌った栄養士の私の謎の歌をボリビアのお母さん達はどのように受け止めてくれたか、今となっては少し恥ずかしい思い出の 1 ページである。



写真5-5 同期と初ウユニ。景色の美しさにはしゃいだ日

今、改めて振り返り、青年海外協力隊に合格し、参加できた事に感謝し、支えあった同期生や仲間、お世話になった人達にお礼の気持ちを伝えたいと思う。ボリビアを介して日本で新しく出会った友人も多く、ボリビアへの赴任は私の一生を左右したと言って過言ではない。これまでと違った価値観や交友関係を与えてくれたボリビアに対して、2年間で私にどれだけの事が出来たのか判らないが、私のこれからの長い人生の中でボリビアを日本（や世界に）広める活動をしたり、日本との交流を深める橋渡し役を務めたりして役立っていたら良いなと思っている。私はボリビアが大好きである。これからもボリビアやボリビアに関わる人達と末永く関わりを持ち続けていきたいと思う。

ボリビア関係刊行物の頒布斡旋

1. 『Los japoneses en Bolivia』 2013-9
100 años de historia de la inmigración
japonesa en Bolivia
を原典として2012年までを追補 在庫多数
2. 『大地に生きる沖縄移民』 2005-12
コロニア・オキナワ入植50周年記念誌、
在庫なし
3. 『ボリビアを知るための73章』 (第2版)
2013・2 明石書店刊行

○上記は、1、2とも統一価格 2500円、
3は2000円 (いずれも税・送料込)

○ご注文は下記当協会までメール又は電話でお名
前、ご住所、電話番号、書籍名、冊数をご連絡く
ださい

admin@nipponbolivia.org 042-673-3133

○お支払は銀行振込でお願い致します。
(口座番号、名義人は発送時ご連絡します。)

協会関係活動の近況

- 10月6日 BoliviaFestival2019 11:00-18:00
会場：東京港区・芝公園・23号地。
- 10月10日(木) 日本人ボリビア移住120周年
記念コンサート：ピライ・ヴァカ (Pirai Vaca)
氏と猪居亜美氏のクラシックギター演奏
信濃町・民音文化センターB2
- 10月25日(金) アンヘラ・アイリオンボリビア多
民族国駐日本臨時代理大使 離任送別会 新橋
・木曾路にて
- 12月5日(木) 当協会主催 X' Mas イベント
(講演+懇親会) : 18:00~21:00 サロン・ド
・ジュリエ。講演：フォルクローレの成り立ち
と特徴、懇親会とフォルクローレ演奏、桑原健
一氏とトリオ「東京リヤマ計画」会員非会員合
わせて43名の出席

ボリビア関係イベント近況

- 10月1日(火) ~3日(木) 第60回海外日系人協
会 東京・千代田区・憲政記念館
天皇皇后両陛下御臨席、ボリビアから留学生など
3名参加
- 10月26日(土) 日本人ペルー移住120周年企
画:ニッケイペルーに渡った私のおじいちゃん
映画上映 リレートーク、フリータイム
会場：LIVE HOUSE LOFT 9 Shibuya(渋谷)
- 11月2日(土) ~2020年2月2日(日)
JICA主催ボリビア日本人移住120周年記念展示
「ボリビアに生きる日系人 一守りゆく伝統、見
据える未来」 展示; 「ボリビアに生きる 日
系人の生活とその心」 JICA横浜海外移住資料館
- 11月17日(日) 公開講座
「日本人ボリビア移住120周年を迎えて」
講師 安仁屋滋(ボリビア日系協会連合会事務局
JICA横浜)
- 12月6日(火) ラテンアメリカ協会連絡会 内幸
町 プレスセンター
- 12月8日(日) SDG s 未来都市環境絵日記展2019
JICA協賛 横浜大榎橋ホール
ボリビア・サンファン学園生20名の作品展示

編集後記

日本人ボリビア移住120周年を記念して様々な
イベントが行われました。本号は記念号と銘打って
お送りします。
当協会副会長を長年務められた杉田房子氏(旅行作
家・Cantuta元編集委員)が10月6日ご逝去されまし
た。謹んでご冥福をお祈りいたします。(享年86
歳)

編集委員 椿 秀洋 杉浦 篤 細萱 恵子

Copyright© 2002-2019

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)